企画書「生の記号- ポートレートの現在形」

主催：NPO アートフルアクション （担当：宮下美穂・dzf14052@nifty.com）
企画：村山悟郎（gustuv56@gmail.com）
会場：小金井シャトー２F
開催時期：2017年11月11日（土）～12月３日（日）＜月・火 休廊＞
搬入設置：11月 7, 8, 9, 10日

概要：

「生の記号」をテーマに、美術のグループ展を開催する。「生の記号」を、直に言い当てることは難しい。「生の記号」とは、否定の言明で言えば、記号の意味解釈的でない水準のことである。とすると、言語で、記号の意味解釈的でない水準を説明しなければならない。これは原理的に困難なので、直接的な言及が難しいのである。しかし、それは確かにそこにある。

では「生の記号」とは、どのようなものか？人が記号を用いて表現を行うさい、その作家の認識や知覚あるいは無意識にまで染み込んで血肉化した記号制作の手つきや発露を思い浮かべてほしい。記号のブリコラージュ。あるいは、記号的な配置から何らかの要素を遊離させることで、私たちの記号認識における前-解釈的な水準が明らかとなるような経験。そのような、記号的でありながら意味解釈に収束しない作品に着目する。

現代はマスメディアやネットの普及を背景に、氾濫する記号のフローに晒されている。人の知覚/認識には、その記号群が還流しており、自らの世界を形成する-これが生の記号となる。本展の作品は、その生の記号を実体として見せる媒体である。芸術家は、ときに驚くべき感性によって生の記号を鮮やかに表出させることができる。

生の記号は、死んだとき、記号論となる。逆に言えば、意味解釈され記号論化される以前の記号を、生の記号と呼んでいる。記号が現実の状況においてその役割を終えると、記号論的な分類（シンボル、アイコン、インデックス等々）が与えられ、意味解釈が行われる。本展は、そうした意味解釈よりも前段階にある記号性を芸術制作に見てとろうとするものである。それは記号論的な構成を与えて意味解釈を問うような西洋的な記号の理論実践とは一線を画すものだ。

本展ではとくにポートレートに着目する。美術史において通時的なジャンルを経由することで、「私たちの時代のポートレート（人物像）とは、果たしてどのようなものか？」という問いを、大きな時間の流れのなかで想像できるようにしたい。

出展作家（予定）：
小沢裕子 OZAWA, Yuko (1984~)、神馬啓佑 JINBA, Keisuke (1985~)、奥田栄希 OKUDA, Eiki(1985~)、笹岡由梨子 Yuriko Sasaoka (1988~)、倉田悟 KURATA, Satoru (1991~)、多田恋一朗 TADA, Koiichirou (1992~)、根本祐杜 NEMOTO, Yuto (1992~)、村山悟郎 MURAYAMA, Goro (1983~)

狙い：
小金井シャトーは場所が都心からは少し離れていますが（最寄りは中央線武蔵小金井駅）、武蔵野美大が隣りの駅近くにあります。そこで武蔵美の学生達に向けて、制作の１つの在り方を示すような展覧会内容を意識しています。作家の世代も、80年台生まれと90年台を混ぜる感じです。
ロンドンの美大の卒制などでは、記号論的な構成と解釈/読み解かせ系（？）と呼べるような作品に頻繁に出会いましたが、日本ではもっと前解釈的な記号性を巧みに操作して作品をつくっている作家に面白い人がいるような気がしています。そういった作家達をフィーチャーできればと思いました。本展でしっかりしたアーカイヴをとって、さらに企画を大きくして別のスペースでも展開できるようにするなど、今後も皆で成長できればと思います。

小沢裕子 OZAWA, Yuko (1984~)

神馬啓佑 JINBA, Keisuke (1985~)

奥田栄希 OKUDA, Eiki(1985~)

笹岡由梨子 Yuriko Sasaoka (1988~)

倉田悟 KURATA, Satoru (1991~)

多田恋一朗
TADA, Koiichirou (1992~)

根本祐杜
NEMOTO, Yuto (1992~)

村山悟郎 MURAYAMA, Goro (1983~)